

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2011年1月発行～

# ひびきジャーナル



〒106-0031 東京都港区西麻布 2-9-2 Tel:03-3407-3726

Fax:03-3797-5640 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

## No.27

発行日 平成23年1月25日

発行責任者 玉木宏樹

編集 NPO 法人 純正律音楽研究会  
玉木宏樹・相坂政夫



新年あけましておめでとうございます。昨年中はいろいろとお世話になり、誠にありがとうございました。本年もよろしくお願ひ申し上げます。ひびきジャーナル No.27 の発刊です。昨年12月23日都電貸切純正律音楽コンサートには沢山の方々にご来場頂き、誠にありがとうございました。昨年12月中旬に出版された、玉木宏樹の「革命的ヴァイオリン入門教本 by Duo」が大変好評のようです。今年は、純正律とは何か？ということも多くの方々に知って頂くために、「純正律音楽入門セミナー」を毎月1回ないし2回開催する予定です。第1回は1月22日(土曜日)でした。次回は2月26日です。また、桜が満開の4月2日(土曜日)には、茗荷谷の「ラリール」にてコンサートを開催致します。ご予約等、詳細は巻末にございます「今後のスケジュール」にてご確認ください。

♪巻頭対談♪  
《純正律にするとお箏が喜んでいる》

対談、吉原佐知子さん(洗足学園音楽大学非常勤講師)  
(現代邦楽研究所講師)

玉木宏樹

吉原さん：あけましておめでとうございます。今年もよろしく申し上げます。

玉木：おめでとうございます。こちらこそよろしく申し上げます。

ところで、今年の4月24日の初リサイタル、大成功だったね。

吉原さん：おかげさまで、玉木先生の新曲「オンディーヌの眼覚め」が大好評でした。

玉木：その新曲の感想はどうだった？

吉原さん：あのエオリア音階の旋法は、お箏の調弦ではあまりないのですが、聴いている人が大変聴きやすかった、と言っては失礼かも知れませんが、大変良かったとお友達も言っていました。

玉木：僕のことを「よいしょ」しているんじゃないだろうね。

吉原さん：いいえ、そんなことはありません。

玉木：あの曲そんなに難しくなかったでしょ。

吉原さん：テクニク的には、そんなに難しくはありませんでしたが、曲作りというか、雰囲気を出すのが難しかったです。

あらためてリサイタルの時の演奏を聴き直してみると、他の曲と全然感じが違って、自分でもいい出来で弾けてたと思います。

玉木：いわゆる旋法で作っている曲なんで、普通の調性とも少し違うんだ。

吉原さん：その旋法で洗足音楽大学の「邦楽ワークショップ」という授業で、ワークショップをするにあたり、少し研究をしたら、村治佳織のアランフェス協奏曲によく似ていたので、箏をエオリア調(オンディーヌの調弦)にして、生徒とアランフェスのまねごとをした音楽づくりをしたりして盛り上がりました。

玉木：そういえば同じ旋法だね。



ところで、吉原さんは邦楽をやっているけど、邦楽と洋楽の際立った違いは何だろうね。

吉原さん：日本の音楽はお座敷芸的な感じがします。曲も昔は演奏者が作ったのがほとんどで、洋楽のように「作曲家」がしていたわけではありませんよね。西洋の楽器は調律が決まっているけど、日本の楽器は基音は楽器同志合わせて、あとは相対的に調弦をとっていきます。

玉木：一番の違いは、邦楽は融通無下なんだよ、ピアノはピアノのちゃんとした決まりの高さがあって、でもほとんどの楽器がそうなんだけど、なんでもかんでも杓子定規に音の高さを決めていく、そう言う点では、お箏は近いかもしれないが、琴柱をいくらでも変えられからね。日本の楽器は折りたたみ出来るものが多いね、お箏は違うけど、たとえば三味線。

吉原さん：三味線は三つになるんです。

玉木：そうだね。尺八は二つになるし、いちばん面白いのは鼓だね。いくつかバラバラに分かれて、風呂敷から取り出して組み立てている。そう言う意味でも融通無形のものなんだな。大変面白いね。

吉原さんはいつ頃からお箏を始めたの？

吉原さん：6歳の6月6日芸事を始めると上達するという言い伝えがあるので、私は6歳の6月6日に始めたようです。

玉木：へえー、そんな言い伝えがあるんだ。始めたようです、と言うことは吉原さんは覚えていないんだな。

吉原さん：そうです、覚えていませんが、母がそう言っています。

玉木：最初はお母さんに習ったの。

吉原さん：そうです、最初は母から習っていましたが、その後は母のお弟子さんから習い、その後、芸大の先生に習っていました。

玉木：やっぱり親子と言うのはうまく行かないね。

吉原さん：その通りでうまく行きません。私は母に直接習ったと言う記憶は余りありません。

玉木：ところで、まっすぐ芸大に入ったわけじゃないんだろ。

吉原さん：大妻女子大に行っている20歳の時に現代邦楽研究所が出来て、女子大に通いながら現邦研に入り、女子大の後、育成会(NHK)、その後、芸大に行きました。

玉木：大妻女子大の専攻はなんなの。

吉原さん：管理栄養士です。これでも、管理栄養士の国家資格を持っているんですよ。

玉木：それはすばらしい。

吉原さん：私は西潟昭子先生が主宰する現代邦楽研究所の栄えある一期生です。

玉木：現代邦楽研究所は何年になる？

吉原さん：今年で16年目になります。

玉木：お箏は生田流と山田流があるけど、僕にもよくわからないけど、この二つの流派の大きな違いはなんだろうね。

吉原さん：爪が違います。山田流は爪が丸いから真っすぐあてるので、真っすぐ座る。爪が厚めなんです。だからしっかりした音が出ます。生田流は四角い爪で角で弾くから、ななめに座ります。生田の方が速い曲が弾きやすいです。山田流は歌ものが得意ですが、生田流は手の方にはしるからか、歌ものをする人が少ないです。

玉木：生田流は関西だろう。

吉原さん：そうです。東京の昔からある私立のお嬢様学校の箏曲部は、ほとんど山田流です。

玉木：生田と山田で、お箏の違いはあるのかね。

吉原さん：今は違います。前は長さが違っていたのですが、今は統一されて約1m82cmくらいです。胴体は桐の木で、弦は絹糸か、強力テトロンです。芸大だけは未だ絹糸を使っていますが、絹糸はなくなってきましたし、高いので今は強力テトロンが多いです。

玉木：生田流、山田流とも三味線もやるのは絶対的なものなの。

吉原さん：芸大やプロの先生はほとんどそうですが、今ではお箏だけの人もたくさんいます。

玉木：音程を教えるのに、お箏は琴柱があるので音程はとらえられるが、三味線のつぼは、耳で教えるのか、位置で教えるのか、どっちなの。

吉原さん：耳と位置の両方です。耳の良い人は耳で、耳のできてない初心者の人には位置でも教えています。

玉木：音のつぼ、高さはどういう根拠でとっているんかね。

吉原さん：さわりが響くのです。開放弦のオクターブ上とか、完全4度、5度などが響くんです。響くと気持ちがいいです。調弦からして倍音で

す。レソレとかレラレとか、初心者はこの調弦を合わせることからして苦勞するんですけどね。

玉木：さわりがあるから、難しいと言えば難しいけど、よく響くところを押えればいいんだね。

吉原さん：そうです。それがわかれば、三味線は楽しい楽器だとおもいますけどね。

玉木：琵琶にはあるけど、さわりのない楽器は多いよね。特に西洋楽器は、だからさわりのことを、騒音だと言う作曲家が多いんだ。

吉原さん：へえー、そうなんでかすか？ そういうところが西洋音楽と違うんですね。さわりがひびくのって気持ちいいのに。

玉木：さわりがなかったら三味線にならないもの。倍音的に言ったら三味線は純正律に近い楽器だからね。これを騒音なんて言ってもらってはかなわないよね。インドのシタールという楽器もさわりがあるけど、アフリカのカリンバという楽器を知っている？

吉原さん：知っています。

玉木：あれもさわりがあるよね。

吉原さん：アジア圏に多いのですかね。

玉木：なんでもかんでも決めてかかる西洋音楽では、雑音になる、あまりいいことではないね。

吉原さん：日本の楽器は明治維新の教育改革で、和楽器を排除して、西洋楽器を入れようとするカリキュラムでマイナーになっちゃったんです。戦後何年かして、やっと和楽器を入れようとしたのですが、その時には教育界に邦楽奏者がいなくなっていました。音大に邦楽科がないのはおかしいと思っています。

玉木：邦楽科のあるのは、芸大と桐朋だけかね。

吉原さん：洗足音楽大学や地方にも最近出来ています。でも、まだまだ足りないと思います。

玉木：基本的には日本の音階の理論はピタゴラス音律なんだ。

吉原さん：はい、順八逆六ですね。

玉木：半音が平均律よりも狭いでしょう。

吉原さん：10セントぐらい狭いですね。

玉木：そう 90 セント、これがピタゴラスの特徴で、六段で半音がぶつかる

ところを平均律で演奏するとおかしい、それこそ調子はずれになってしまうのに、なぜみんな平均律のチューナーを使うのかね。

吉原さん：ですから半音を低くとる人が、古典には多いです。今でも古典の人はチューナーを使わない人が多いですよ。

玉木：チューナーも今は、ピタゴラスの90セントが付いているものもある。

吉原さん：そうです、昨年玉木先生とコンサートをした時に、お客さんが「私のチューナーより玉木先生の耳の方が正確みたい」、と言っていました、その通りと思いました。

玉木：あの時僕は、あなたのピタゴラス調律から純正律へ琴柱をずらす微調整をみんなの前でやりましたよね。あれがとても評判がよくて驚かれた。

あゝやって調弦方法を見せちゃうのも分かり易いかも知れない。

吉原さん：そうですね。私が一番ひびきの違いを実感しているかも(笑)

玉木：ある程度はチューナーで合わせたとしても最後は自分の耳でやらなきゃ。

吉原さん：機械もその時反応しても前の音をひろっていたりして、確かでない時もあるんです。やはり耳がたよりです。弾きだしたら気持ち悪い調弦でやりなおしたこともありましたよね。

玉木：吉原さんとは何回かコンサートもやっているんで、純正律とピタゴラス音律と平均律の違いはわかりますね。

吉原さん：わかります。玉木先生とコンサートをするたびに自分の耳も成長している気がします。ありがとうございます。

玉木：純正律でお箏を弾いていると、今までと違った雰囲気になりますね。

吉原さん：純正律にすると、お箏がとっても響くのです。木が鳴っているのがわかる！お箏が喜んでいる気がして、私も嬉しくなっちゃいます。

吉原さんありがとうございました。みなさん、ヴァイオリンとお箏による玉木宏樹作品集「波間のきらめき」「サクラから春の海まで」のCDを是非聴いてください。



## ムッシュ黒木の純正律講座 第 27 時限目

### 平均律普及の思想的背景について(16)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回、平均律の問題を捉え直すということは結局のところ「進化の歴史」を再考するという事なのだ、ということと、そしてそのような「進化の歴史」の形成にあたってマックス・ウェーバーが重要な役割を果たしたということを確認した。今回は具体的にその内容について考えてみたい。

2000年7月3日(月曜日) 毎日新聞夕刊の6頁で自然科学史の専門家として名高い村上陽一郎氏は以下のように言った。

科学は価値に関わらない。かつて人々はそう信じてきた。今でもそう考えている人は多いだろう。マックス・ウェーバーという社会学者は、そのことの学問的裏付けをしたと了解されている。

そうした考え方が、厳密な哲学的吟味に堪えられるのか、疑問を立てることはできるし、またその点での職業的な議論はこれまでに少なくない。しかし、ここはそのことを論じる場所ではない。一般的な理解として、科学は価値に関わらない、という考え方はそれなりに通用してきた。

「科学は価値に関わらない」、ポイントはこの言葉である。人はそれぞれ宗教、民族あるいは国籍に従い様々な価値観を持っており、好き嫌いの別も人それぞれである。更にこのような価値観に基づき人は何かを判断するわけだが、この場合において「判断は価値に関わっている」ということになるだろう。言い換えれば、主観的な判断を下しているとも言える。対して、科学が下す判断は客観的ということになる。科学は、事実を淡々と記述するだけであり、価値観はそれぞれの人によって異なる以上その判断は千差万別であるが、科学が下した判断は誰の目から見ても同一なものとなる。あるいは、科学はこのような唯一の絶対的に正しいを持つために価値に関わることを放棄している、という言い方も出来るだろう。

確かにかつて科学が全能だと多くの人に信じられていた時代はあったのかもしれない。しかし、自然科学史の領域にトマス・クーンやN.R.・ハンソンなどの巨人達が出現し、ポスト・モダンの時代を経た現在では科学とて決して全能

ではないという方向へ人々の認識は変わりつつあると言える。にもかかわらず、科学への信仰はそれでも完全になくなってはいない。それどころか、科学は今もなお確かに様々な領域で有効だし、限界を指摘しつつも何となく科学の客観的真理の正しさを心のどこかで信じながら日々の生活を営んでいるという状態が続いているのではないだろうか？

価値に関わらない客観的知としての科学への対応の曖昧さは、実のところ、自然科学より人文科学のほうが深刻である。何故なら、そもそも人文科学の場合、科学であることの定義付けが脆弱だからである。つまり、端から科学たり得るかどうか確かでないものに、科学的客観的真理の有無を議論したところで意味がないというわけだ。

その中でも、文学やレトリックに比べ歴史学は科学的側面の強い学問だとされてきた。歴史的資料を調べ淡々と実際に起こった出来事を時間軸に沿って記述する学問が歴史学だとすれば、確かに歴史学は科学たり得るだろう。実際、トロイの神話のように長い間作り話と思われて来たが遺跡が発見されたことによって史実と認定された事例もあれば、日本の古代遺跡のように一回は学会で承認されながらねつ造が発覚した途端に事実から追放されるような事例もある。

しかし、歴史学は本当に科学的なのか、つまり価値に関わりの持たない客観的真理に基づいているものなのだろうか？ もちろん、学問である以上、歴史学がなるべく公正で正しい知たろうとしているのは明らかである。ただ、そこに価値に関わりを持っていないかということ、決してそのようなことはない。歴史学の判断は確実に一定の価値観に基づいているのである。すなわち、決して実際にあった事実を時間軸に沿って起こった順に並べたものが歴史学ではないのである。

例えば、キリスト教保守の立場を取ったクリストファー・ドーソンは、神がイエスという人間の姿をとり現世に誕生した年を0年、つまり中心として定めるキリスト教のみが真の歴史的宗教であるとした。この主張には、最初に神の手によるこの世の「始まり」があり、そして我々が生きつつある「現在」があり、最終的には神による世界の救済が果たされる「終わり」がある、という思想が根底にある。つまり人類は過去＝創世から未来＝救済に向けて進んでいるのだという「進化」の思想である。この考えに従えば、過去から未来に一方通行で進む時間という観念のない仏教は、歴史的宗教ではないことになる。更に、



神が人の肉体を持ってこの世に現れた0年という年号を持たないユダヤ教やイスラーム教も歴史性が弱いということになる。

すなわち、歴史とは単に起こった事実を並べたものではなく、ある一定の価値観に基づき、その価値観に合致する事実を選び、そぐわない事実を排除することによって綴られる物語ということになる。となれば、歴史学の論争とはある価値観とある価値観の政治的な衝突ということになり、そこにおいては客観的な事実が冷静に検証されるということは基本的にあり得ない。もちろん、学問である以上、なるべく正しいことが追求されるのは当然である。しかし、そこで主張される正しさには常に何らかの価値観が反映しているということは決して忘れてはならない。

以上のことを考えれば、平均律18世紀普及派と平均律19世紀末普及の間にあるのも、一定の価値観に基づいた政治的対立である。ここで愚かしいのは、相手よりも自分達がより科学的で客観的な判断をしていると思いつついることであるが、残念ながら、今まで見る限り両派ともその域を出ていないように思われる。そして、この論考における私の目的とはそれぞれの学説のその価値観を観察することであるということは今一度繰り返しておきたい。

**天国的純正律音楽入門 第27回 連載**

**《邦楽と純正律、あれこれ(続)》**

純正律音楽研究会代表

作曲家・ヴァイオリン奏者 玉木宏樹

前回、三味線の「サワリ」について書きました。沖縄の三線が伝わってきて三味線になったと言われていますが、沖縄の三線には「サワリ」はありません。実は特長的な「サワリ」は日本に古くからあった琵琶が起源です。三線を発展させ、音を豊かにするために「サワリ」を流用したのです。そして琵琶の先祖はインドのシタールと考えられています。シタールは見事な「サワリ」があり、「ジャワリ」と呼ぶそうです。私は2台の三味線の為に「ジャワリ」という曲

を作りましたが、ビョーンビョーンと倍音が鳴り響く面白い曲です。

尺八もまた、倍音だらけの奏法です。「むら息」という息を叩きつけるような奏法は特に無数の倍音を発します。皆さんも御存知とは思いますが、尺八というのは、一尺八寸のことです。この長さの管が邦楽の基準音である壺越(洋楽の「レ」に近い)のため、楽器名ともなったのです。尺八は一寸ごとに基音が半音ずつ変化します。クラリネットのA管、B管どころじゃありません。

ところで私は若い時、三味線を遊び弾きしていましたが、私と三味線の関わりのお話を以前、私もなぜか理事をしている NPO 法人 現代三味線音楽協会の会報に書きましたので、それを転載します。

### 三味線と私の変なであい。

私は 20 代の後半、渋谷のジャンジャンでヴァイオリンと三味線を持ち替えてたりして、インチキ遊び弾きをやっていたことがある。左手は、ギターとチェロを少しやったことがあるので、指位置にそれほど違和感はないが問題は撥だ。どれだけやってもサマにならないので、専らピックでやっていた。

話は変わるが、私の結婚式の披露宴の写真には、西潟さんが仲人席に座っている。それほど親しかったから、西潟さんから三味線を習ったのかというと、そんなことは全くなかったと思う。実は私の三味線の師匠は、あの豊文姉さんなのだ。私が山本直純のアシスタントをやっていたとき、直純さんは三味線が好きでいつも豊文さんがきていた。面白い人で、譜面は殆ど読めなかったのに「玉ちゃん、玉ちゃん」と言って私を横に座らせ、私がメロディを歌って、指のポジションを譜面に書いて、懸命に演奏するのだ。右手はともかく、左手の勘所は分かるので豊文さんは私を守り神のように拘束する始末。そして直純さんが大声でコードネームを叫んだり、変えたりしているのを見て、あれで和音が分かるの？ などと好奇心の旺盛な人で、ある日、また私が守り神をしていると、ふと「玉ちゃん、アナタ三味線やりなさい、うまくなるわよ」などとおだてる。そして「私が教えるから」などと思いかけないことを言うので、無視しようとする、「私がちゃんと教えるから、レッスン料もいらぬ。そのかわり、アナタは私にコードネームを教えなさい」と強烈なカマシ。驚いているスキにレッスンの日時まで決められてしまった。

決められた日にイヤイヤ出かけると、外出時にビシッと和服を決めている豊文さんのお部屋は猫が王様の物凄い散らかりよう。どうぞ、と言われても座る所もない。そんな中で、三味線のかまえ方、撥の持ち方をビシビシと説明され「ハイ」と言われたので、音を出すといきなり、右手を撥でビシッと叩かれ、それじゃ音にならない、と何度も叱られる。日頃はスタジオで私が文句ばかり言っているのだからその仕返しか、と思っていると、30分くらいたって「はい交替」と言って、コードネームを教えろという。小振りの三味線で8本調子だから「C」のドミソを押さえられない。私も4本調子にしないとダメだという知恵もなかったもので、全く四苦八苦だった。

そんなことがあった後、私も直純さん所を卒業、10年以上たったある日、前夜飲みすぎて二日酔い気味の所へインペク(人集め業者)の女性マネージャーから、必死の表情の声の電話がきた。「玉ちゃん、三味線持ってるでしょう」「そんなもの、皮が破けてとっくの昔に捨てたよ」「えー！でも今でも弾けるでしょう、すぐに東芝のスタジオへ来てよ」「なんだよいきなり！」と言うと、突然電話の主が変わり「私の稽古三味線貸すから、すぐに来て」と何と豊文さん。「師匠がいるのにどうしたの」「私にはできないけど、お玉ちゃんならできるわよ、とにかく大急ぎでかけつけて」というわけで、とりあえずはスタジオに到着し、すぐに三味線を押しつけられ何が何だか分からないままスタジオに入ると、20人以上のミュージシャンが大拍手で私を迎える。席に座り、譜面をみると何と、津軽三味線アドリブと書いてあって、コードネームしかない。こりゃ豊文さんが悲鳴をあげるのも無理もないが、私として、津軽なんてやったことがない。しかし、クソ度胸を発揮して、津軽の雰囲気を出して、無茶苦茶やったのにも拘わらず、大好評で終わった。

こんな話は遠い過去で、今は西潟さんからビシビシと指導を受け、新しい三味線音楽を目指している。サワリの倍音はとても魅力的だ。



## CD レビュー—純正茶寮

〈 Hector Zazou, Geographies〉

純正律音楽研究会理事 黒木朋興



レーベル: Made to Measure

ASIN: B00000I5TG

知らぬ間にエクトール・ザズーが亡くなっていた。フランスのチェンバーロックの雄として雑誌に紹介されているのに興味を持ち、ベストアルバムを買った。初期の頃、ジェゼフ・ラカイユと共に ZNR 名義で発表した2つのアルバムは、サティの楽曲を思わせ、静けさの中に暴力性を感じさせるものであった。それはそれで興味深くはあるのだが、別に純正律音楽研究会の推奨するハモリを重視した音楽では決してない。

フランス語で「アメリカのジャズ好きのエキセントリックな格好をする若者」という意味を持ち、少々ふざけた感じのするこのザズーという名はもちろん本名ではない。今、改めて彼の経歴を見てみると、1948年にアルジェリアに生まれであることが分かる。アルジェリア生まれと言うと、アルベール・カミュやジャック・デリダなどフランスにおいてはアウトサイダー的な知の系譜に連ねる名前が頭に浮かぶ。加えて、48年生まれとなれば、五月革命の時代に青春を過ごしたことになる。ZNRの音楽は明らかにこのような背景を下に作られたものなのだろう。

対して、彼の真骨頂はこのアルバムのような彼のソロ活動にある、と思う。北歐、アジア、アフリカ、ケルト、コルシカなど世界の様々な音楽を録音し、それをスタジオでミュージシャンの演奏、シンセの音やリズムマシンとミキシングして楽曲を仕上げている。格段、純正律を意識しているのではないのだろうが、声楽曲は見事にハモっている。特にこのアルバムは西洋世界の声楽曲を中心に曲を集めてあるので、美しいハモリが堪能出来るだろう。

しかし、彼の特徴はハモリよりむしろそのスタジオでのエフェクター処理にあるのでないかと思う。すべての曲に深いリバーブが施されている。概して、僕は深いリバーブはあまり好きではない。音源が遠くなるように感じられ、興ざめしてしまうのだ。その中でザズーのリバーブ処理は唯一の例外と言ってよい。リバーブが深いのにとっても自然な感じがする。

伝統音楽と最新機材、世界中の伝統音楽、彼は文化を混ぜ合わせることの天才だったのかも知れない。

連載 【偶然のみちびき】  
(～オーディオ篇～)

純正律音楽研究会 理事  
翻訳家・きき酒師 川合 浩

ニューヨークに赴任した折、居間も広くなったしと、オーディオ機器を現地で新調した。日本にいる友人に家電メーカー勤務の駐在員を紹介してもらったら、現地法人の社長だった。その彼から、オーディオ機器とビデオデッキを購入した。しばらく使用していたが、スピーカーに物足りなさを感じ始め、出向先の日系証券会社で机を並べている隣の日本人社員に「こんど、スピーカーを買いたいんですが、アドバイスお願いできますか?」と聞いたところ、意外にも、彼は喜々として快諾してくれた。そして、ビレッジのアパートまで聴きに来ないかと誘ってくれた。それまで、彼がマニアックなほどのオーディオ趣味があることは全く知らなかった。たまたま、スピーカーに関してアドバイスをお願いしてみた相手が、偶然にもかなりのマニアだった。彼はマークレビンソンがお気に入りということで、アパートではML-20を使用していた。プレイヤーは当時としてはハイエンドのCDプレイヤーを使用していたように思う。アナログプレイヤーは日本の自宅に隣接したオーディオルームに置いてあるという。レコードプレイヤーも条件がよければ50KHz位まで拾えると教えてくれた。この言葉で、レコードの可聴域を超えた音域の再生に興味を持った。彼にマンハッタンのオーディオショップ「リリック・ハイファイ」を紹介してもらい、試聴・購入時に同行してもらった。店内に入って予算を告げると人の背丈ほどもあるマグネパンを紹介されたが、日本に帰国後のスペースを思うと、ととてもとても。こちらは遠慮してブックシェルフタイプを希望した。試聴室に

入り、持ち込んだ CD をいろいろ聴き比べ、私はセレクション SL-600 を購入した。おおよそ日本国内の半額でペアで 2,000 ドル程度だったと思う。

私はニューヨーク州の隣、コネチカット州に住んでいた。いわゆるボーナスシーズンが近づいたある日の朝、彼がお願いがあると言ってきた。「レビンソンを追加購入するので、配送先に指定させてくれないか」との依頼だった。セールスタックスの節約のためだ。

ML-20 は日本の半額とはいえ、現地でもペアで一万ドルしていた。数パーセントのセールスタックスでも結構な額になる。事情を察し、私は快諾した。すると、彼はお礼がしたいという。それならと、おおよその予算を確認した上で、スコッチのバラнтаイン 30 年を希望した。当時ニューヨークで 85 ドルほどだった。当時の日本価格とは桁が違う感じだ。職場仲間でイギリス人がいたが、彼も「スコッチ インニューヨーク イズ チーパーザン インスコットランド」というほど、NY でスコッチは安かった。私の提案を伝えると彼は快諾した。

その日の昼、昼食を済ませ、30 階の窓から下の道路を見ると、彼がなにか小袋をぶら下げて、楽しそうに軽快に歩いてくる姿が見えた。あの小袋の中身、大きさと形状からまさか。とっていたら、彼がオフィスに入ってきて、私にその小袋を差し出した。早い、もう例のバラнтаインを調達してきたのだ！

そして、配達予定の日。家にいる家内にも伝えておいたので、電話してみると、着いていないという。彼は心配になって、レビンソン社に電話すると、手違いでまだ発送できていないという。彼は待ち遠しいから、いろいろ話したみたいで、結局、レビンソンの工場に受け取りに行くことになった。そして、工場や試聴室の見学もついでにと、目論んだ。

土曜日に彼の同僚の車と私のアウディで工場に向かった。拙宅からは 2 時間弱だったと思う。工場では写真も OK で、随分と撮らせてもらった。試聴室は残念ながらリモデル中で試聴自体はかなわなかった。

そして、翌年も、発送先を我が家にし、今度はきちんと配送された。そう、これが、彼にとって 3 セット目の ML-20 なのだ。

ニューヨーク勤務は私が先に終え、彼が後になったが、彼の帰国後、彼のリスニングルームにお邪魔させてもらった。待ち合わせは自由が丘駅。彼の最寄り駅だ。ここまで書くと、彼がどなたかが分かる人もいるかもしれない。現在、彼のリスニングルームは新築され、使用機材も進化を続け、オーディオファンにとって「メッカ」といわれるほどになっているらしい。

連続エッセイ【外科医のうたた寝】第25話

『大阪で食べて、走る』

純正律音楽研究会理事

福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

年が明けた。これから4月までがマラソンのハイシーズンであり、僕はフルマラソン3レース、ハーフマラソン5レースを走る予定である。そのなかで勝負レースと位置付けているのは、別府大分マラソン(2/6)と長野マラソン(4/17)である。その他に出場するレースは、本命レースにむけたスピード練習であり、全国のマラソン大会を巡る旅である。このマラソン旅が最高に楽しい日々である。日本では2000以上のマラソン大会が開催されており、可能な限り多くのレースを走ってみたいと思っている。

1月10日、大阪の淀川河川敷で行われた<ひらかたハーフマラソン>に参加した。なぜこのレースに行ったのか？答えはシンプルだ。大阪に食い倒れに行きたいからである。

レース前日、早朝の新幹線で大阪へ向かい、地下鉄とチンチン電車を乗り継いで、堺にある「銀シャリ屋・ゲコ亭」を訪れた。80才の老店主が毎日20升以上炊き上げるゴハンが絶品である。その後は難波に移動して、「一芳亭」の焼売と唐揚げと生ビール、「自由軒」の名物カレー、「みんな」の餃子と焼きそばをハシゴした。

翌日はレースである。ハーフマラソンを走り終わると、さっそく新世界に移動した。じゃんじゃん横丁の串揚げ店「キクヤ」は、10年以上通っている僕の大好きな店である。カウンターだけ8席の小さい店で、生ビールを飲み、1本100円の野菜、魚貝の串揚げを次々に食べるのは、レース後の至福のヒトトキである。

走るついでにその土地の名物を食べると言うよりは、食べ歩きの合間にマラソンを走る旅は、まだまだ続く。

「Musica おおた」の音楽よもやまばなし

**カンボジアの子供たちに音楽を**

**【第2話】**

純正律音楽研究会 正会員  
音楽事務所 Musica おおた  
廣川 深

今回は「JHP・学校をつくる会」の紹介、私がそこでボランティア活動(カンボジアに送るための中古楽器の清掃、整備)に参加していること、中古リード楽器整備の問題点などをお伝えしました。さて、私たちが整備してカンボジアに送られた楽器がどのように使われているのか、どのような教育が行われているのかを知るために、私は昨年12月にカンボジア・スタディーツアーに参加し、いくつかの学校や施設を見学し、子どもたちとの交流をしてきました。今回はそのレポートです。

カンボジアは12月が1年で最も過ごしやすい季節。といっても、日本の真夏ほどの気温です。プノンペン市でまず驚いたのが、道路いっぱいに広がって走るバイクの大群。そのバイクの群れをかわしながら、私たちを乗せたバスは走ります。2日目に行ったクダタコイ小学校では、JHPのボランティアによって建造されたブランコを修理し(ペンキ塗り直し)そのあと早速子どもたちとの交流を行いました。都合よくJHPの現地事務所にアコーディオンがあったので、活用させてもらいました。子どもたちは日本の歌もいくつか知っているようです。どの学校でも歌ったのが「幸せなら手をたたこう」でした。また、音楽交流会を行った学校で子どもたちが演奏してくれたのは、「あれ？夕やけ小やけじゃん！」。この曲、歌詞の意味は日本とは全く違うようですが、どこの学校でも鍵盤ハーモニカで練習していました。異国の地で日本の童謡が聴けるとは思ってもいませんでした。

美術の交流会ではクリスマスカードを作り、子どもたちと交換しました。そのときも隣の教室から「夕やけ小やけ」が聞こえてきましたが、よく聴いていると2部合奏のパート練習のようでした。2つのパートを合わせると3度音程のアンサンブルになります。ご承知のように、3度を美しくハモらせるのは結構微妙です。このような使い方をするのであれば、いくら中古楽器といえども、整備にあたってはもう少しピッチに気をくばらなければいけないなと思いました。また、別の学校では、マーチングバンドの練習を見学しました。ドラム、シンバルなどの打楽器と鍵盤ハーモニカ、リラグロックンという編成でした。音楽の授業では、ドレミで音階を歌う練習をしていました。上行音階はよいの



ですが下行音階においてシの音を低くとる子どもが多かったです。何度やってもその傾向がありました。私はカンボジアの民族音楽を研究したことはないけれど、もしかしたら伝統音楽の影響なのかもしれません。

幸せの子どもの家(CCH という施設)では、カンボジアの歌「アラピヤ」を私のアコーディオンに合わせて、子どもたちが元気よく歌ってくれました。子どもたちの笑顔は私にとっては最高の贈り物です。

このように、短い時間で子どもたちの活動のほんの一部を駆け足でかいま見ただけですが、ピッチの問題をはじめ、楽器のリペア技術者がいない、美術や音楽が正規の教科とされていないなど、問題点をいくつか見いだすことができました。

今回のスタディーツアーは大変有意義でした。私は現在、アコーディオンのほか「子どものための音感教育」を担当していますが、ちょっとしたアイデアをもらったところもあり、得をした気分です。こうして初めての海外でのアコーディオン演奏はカンボジアになりました。また、是非行きたいと思います。子どもたちの笑顔を見るために。

## イベントレポート

11月16日火曜日

### 【純正律音楽ボランティアコンサート】

河口湖の介護老人保健施設「はまなす」で、利用者や家族のために純正律音楽コンサートを開催しました。また施設の職員だけのコンサートを夕方から行い、皆様方に大変癒されたと大好評でした。



12月15日水曜日

### 玉木宏樹の【革命的、ヴァイオリン入門教本】が発売 !! CD 付き

先生とのデュオひたすら開放弦から

- \*アンサンブルの楽しさが分かり、他人の演奏を聴くことが養われる。
- \*先生の演奏に合わせるため、音程がよくなり、ハーモニーの感覚が鋭くなって、美しい響きの音楽ができる。

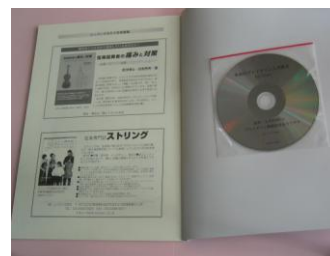


\*全音符にしても休符にしても、先生の演奏を聞けば、自然と拍子のとり方が分かる。

\*トータルに音楽をつかむ訓練になる。

\*リズム感も身につき、強弱のバランスも分かってくる。

\*ホーマン等の Duo にくらべ、この教本は二人の独立性を重んじるために、出来るだけ大意法的工夫を凝らしてみました。曲がうんと立体的に聞こえるはずです。



2011年1月22日

### 【第一回純正律音楽入門セミナー】

純正律音楽研究会の事務所で第一回の純正律音楽入門セミナーを開催いたしました。ハーモニートレーナーによる純正律と平均律の聴き比べや、カーツウェルによる複雑な和音の聴き比べ、また、世界の純正律音楽 CD の紹介、玉木が作曲をした純正律音楽の実演と盛り沢山のプログラムでした。この模様は今回初めて、USTREAM でライブ配信をしました。録画されておりますので USTREAM の tamakihiroki で検索して是非御覧下さい。



今後のスケジュール

2011年2月26日土曜日 14:00 から

### 【第二回純正律音楽入門セミナー】

場所：純正律音楽研究会 事務所

料金：1,000 円 (会員特別価格 500 円)

ご予約：電話 03-3407-3726

2011年4月2日土曜日 開場 13:30 開演 14:00

### 【♪純正律音楽コンサート♪】

場所：『ラリアル』地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅徒歩 6 分

出演：三宅美子(ハープ)・玉木宏樹(ヴァイオリン)

料金：3,500 円(会員特別価格 3,000 円)

ご予約： 電話 03-3407-3726 FAX03-3797-5640

mail：[puremusic0804@yahoo.co.jp](mailto:puremusic0804@yahoo.co.jp)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒106-0031

東京都港区西麻布 2-9-2 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-3407-3726 FAX：03-3797-5640

e-mail：[puremusic0804@yahoo.co.jp](mailto:puremusic0804@yahoo.co.jp)

<http://just-int.com/>

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

平成 23 年 1 月 25 日

発行責任者： 玉木宏樹

編集： 相坂政夫